



大きな課題と小さな成功

(10月のごあいさつ)

平成28年10月3日(月)

10月は沖縄の秋です。今年は台風も来て、虫の聲が一斉に賑かです。

国内経済の不調は、結局のところ**消費**にあると考えられる。政府及び日銀の積極的な財政、金融政策にもかかわらず、**物価上昇率**は、原油と生鮮を除いても約1.3%程度に低迷し、投資と消費は一向に伸びない。法人企業統計によれば、最近の企業**ROA**(営業利益/総資産)は約**4%**にも達し、それに対して**支払金利**(支払利息/有利子負債)の比率は約**1%**と低位にあるにもかかわらずである。

これは通常の事業活動を行っておれば、差引約**3%**の支払利息控除後の**営業利益が可能**であることを意味している。また、企業の**ROA**は、時によってはある意味で支払利息控除後の**予想物価上昇率**と言ってもかまわないと思う。従って、その部分だけで約**2%以上の物価上昇率**を期待できるとも言える。これだけしても消費が上昇しないということは、まるで、馬を水辺に連れてきても、**水を飲ませることができない**ような状態である。

眼を沖縄の経済に転ずると、にわかに活況を呈している。外国人観光客の来訪をはじめ、県内観光は絶好調である。情報産業は県の計画通りに大きな発展のきざしが見られる。活況に支えられて、アベノミクスがいうところの労働者の給与等は増加の傾向にある。それらが相俟って消費は好調である。すなわち**馬は水を盛んに飲んで**いる。公共工事は高水準に推移し、県経済を支えている。沖縄の活況の原因である以上の4点については、**全国的にもほぼ同様の対策**がとられている。

日本の課題は大きく、**沖縄の成功**は小さい。しかし、いつの場合でも、大きな課題の解決のためには小さな成功の例に注目する必要がある。同じ傾向とならないのは、経済の構造的な相違あるいは問題があるのかもしれない。

日本経済が**成長期を過ぎて**、消費は、景気の循環や金融財政政策に反応せず、景気の上昇期にも物価や消費は上方に反応せず、下降期には下方に反応するためかもしれない。過去の成長期と較べて、経済の状況が大きく変化してしまったと考えるべきだろうか。